

大悲閣千光寺の数学、和歌、そして了以の残したもの

1614年、大悲閣千光寺は二尊院の僧によって天台宗の寺院として建立された。元々は別の寺院群に属していたが、京都の商人であった角倉了以（1554－1614）によって現在の場所に移された。千光寺の本尊は了以の念持仏であったと伝えられる10世紀の僧源信（942－1017）作の千手観音像である。1808年、千光寺は了以の子孫によって再興された。この時、黄檗宗の下で再興されたのが千光寺である。現在ではこの寺は特定宗教とは無関係となり、住職の説法も各種禅宗の宗派の考えを取り入れている。

千光寺はそろばん、計算をするときに数字を把握するために使われていた道具との面白いつながりがあることで有名である。そろばんは室町時代（1392－1573）の始めに中国から日本にもたらされていたが、角倉家の親戚である吉田光由（1598－1672）が1627年に計算に関する本を出版するまではあまり使われていなかった。塵劫記は、お釣りを計算するといった生活上の問題を解決するためにどうそろばんを使うかをわかりやすく説明しており、後の江戸時代（1603－1867）にはもっとも知られた数学の本となった。2013年、千光寺の住職は仏教の歴史とそろばんのつながりについての説教を多く記した。同年には高さ1.1メートルの全てそろばん玉でできた三重塔が寺に寄贈された。そのようなつながりから、そろばん寺と呼ばれることもある。